イスラム僧院建築とスーフィズムの大衆化に関する考察

ベクタシ教団の僧院建築の実測調査を基礎資料として

RESEARCH ABOUT DEVELOPMENT OF DERVISH LODGE THAT RELATES WITH POPULARIZATION OF SUFISM

The survey of Bektash dervish lodges

山本達也*

Tatsuya YAMAMOTO

This paper researches about development of dervish lodge that relates with popularization of Sufism. Various bektash dervish lodges in Turkiye were analysed in this research. Popularization of Sufism had two steps. First, Sufism joined men came to the stage, constructing tombs, meeting and pilgrimage rooms which had axis and Islamic proportion were built. Second step was patterned training (style of whirling dance). Beside to whirling dance room, library, Turkish bath and madrasa were constructed. In these buildings Islamic proportion and axis couldn't seem except the axis through Mecca.

Keywords : *dervish lodge, Sufism, Bektash, whirling dance, axis, proportion*

イスラム僧院, スーフィズム, ベクタシ, 旋回舞踏, 軸線, 比例

1. はじめに

スーフィズム(イスラム神秘主義)の大衆化とともに、教団も修行僧のみの場であったものが、一般大衆のものとなる。教団の組織形態の変革および修行形態の確立にともない、僧院(テッケ)の存在理由そのものが変移していく。その変移をたどり、スルタン等の為政者によるものではない、一般大衆の中世トルコ・イスラム建築について考察することを本論文の研究目的とする。

イスラム世界の各地で高名なスーフィを中心に数々の教団が作られたが¹⁾、ふたつの理由から、ベクタシ教団の僧院建築を中心に論ずることとする。第一の理由は、アナトリアの地で結成され、オスマン帝国の親衛隊(イエニチェリ)と深い関係を持ち、オスマン帝国の版図拡大に大きな功績を残し、大衆の支持を得たこと。第二の理由は、トルコ国内に遺構があり、教団拡大期の資料が現存するからである²⁾。これらの資料から、ベクタシ教団はその性格を歴史的に3つの時期に分けれる。

① 教団成立期(13世紀) 教祖ハジ・ベクタシを中心に、彼が行なった修行方法を繰り返すことにより、神秘体験を得ようとした時期。

② 聖者崇拜期(14, 15世紀) 教祖ハジ・ベクタシの死後、その徳にあやかろうと集まって来た在俗スーフィーを教団に取り入れた時期。

③ 修行道場期(16~19世紀) 修行形態が確立され、一般の人でも簡単に参加できるようになり、僧院そのものが共同体の象徴となった時期。

この3つの時期に応ずるべく、新たな僧院の建設、増改築が行なわれた。それぞれの建設の様子を、実測調査を行なったトルコ国内のベクタシ教団の僧院に関して論ずる。また資料を補足する意味合いから、他教団の僧院建築、特にメヴラナ教団のものを参考とした³⁾。

2. 教団成立期

ベクタシ教団は、ハジ・ベクタシにより1270年、アナトリアの小都市ネブシェヒールで結成される。彼の死後(1296年)、生前修行の場として使用していた独居房が、教団員の修業の場とされる。また、1298年には霊廟が建設される⁴⁾。

現在のハジ・ベクタシ霊廟は、ハジ・ベクタシの棺を中心に彼の子孫等の棺も配され、建物の一部には旋回舞踏をするための祭礼場(セマハネ)さえ設けられている。この霊廟は数度の増改築を経て現在の姿となった⁵⁾。正出入口部分は砂岩の切出し石、後方の祭礼場は乱石積みであるが、1298年に建設された本来の霊廟は、大理石の切出し石により建設されている。さらに、祭礼場の部分も大理石の切出し石だが、その大きさが霊廟部分のも

* アナドル大学建築学科 専任講師

Lecturer, Dept. of Architecture, Univ. of Anadolu

のに比べて大きく、霊廟との連結部分では鉄の楔が石の中ではなく、壁に露出する形で埋め込められている等、後世の増築であると考えられる(図-1, 2)。ハジ・ベクタシの棺のある、本来の霊廟の入口上部の装飾も、鐘乳石状のものであるが、オスマン期のものように洗練されたものではなく、パターン化される以前の、セルジューク期の形式に属するものである。さらにその断面を詳しく調べてみると、高さ1.20m~3.10mにかけて隅部の切出し石の一部が傾いた形で積まれており、そこに床があったものと考えられる(図-3)。初めは墓室と玄室が上下に重なる形で建設されたが、時代とともにハジ・ベクタシの棺の存在を強調すべく、玄室の床が取り除かれ、垂直性を強調する空間に改められたと考えられる。つまり、高さ3m程度のヴォールト床(天井)であった墓室が、改修によりドーム天井に改められた。また、5.32m~6.68mの高さで正方形平面を正八角形平面に移行させているターキッシュ・トライアングルがある。このような構造的特长から、さらに13世紀にアナトリアの各地でさかんに建設されたキューベットと呼ばれた墓標を参照しつつ⁶⁾、復元してみると、図-4のようになる。

セイト・バツタル・ガジ僧院(ベクタシ教団)の霊廟でも同じようなことが言える。この建物では最初から霊廟がモスクとの複合施設として1208年に建設され、墓室と玄室は分けられることなく、初めからひとつの空間として計画された⁷⁾。イスラム建築で重視された黄金比による比例関係は断面で使われている。一辺が5.05mでその径が10.85mの正八角形平面で、高さ15.83mのドーム天井の墓室である。切出し石によって壁は7.60mの高さまで垂直に積み、そこでスクインチにより、10.85mの高さで正十六角形にその平面を変え、その位置よりドームが立ち上がる。つまり、スクインチの架った部分とそれ以外の部分の比は、 $1:\phi^2$ ($\approx 3.25\text{m}:7.60\text{m}$)になる。ドームの真下、床より3.40mの高さに、この霊廟の視覚的中心であるエメラルド・グリーンの球体が吊られる。この球体は、霊廟室内を高さで $1:\phi^3$ ($\approx 3.40\text{m}:15.80\text{m}$)に分割する。

教団成立期の僧院建築としては、ベクタシ教団のこの

図-1 ハジ・ベクタシ霊廟 平面図

図-4 ハジ・ベクタシ霊廟 復元

図-2 ハジ・ベクタシ霊廟 立面図

図-3 ハジ・ベクタシ霊廟 断面図

2つの霊廟建築の他には、トルコ国内ではメヴラナ教団の総本山であるコンヤのメヴラナ僧院の霊廟が現存する程度である。

3. 聖者崇拜期

聖者の遺徳を慕って在俗スーフィたちが集まってくる。教団は彼らの要望に応えるべく、教団成立期の建物、特に霊廟のまわりに様々な施設を建設する。まず説教のための礼拝堂、会合を行なうための集会室が、さらに個人の修行の場として僧房が建設される。修行僧は窓ひとつない僧房の個室に籠り、精神の緊張を高めることに努めた。暗黒の僧房で見た様々な像(イメージ)がその修行僧の精神状態を示し、高僧の指導により、より上位の悟りを得る手掛りとなった。ハジ・ベクタシ僧院では、木組みのドームの架った集会室と細長いL字形の廊下で結ばれた小室がその修行に使用された。セイト・バツタル・ガジでは、隣接のビザンス教会の基礎を利用し、ウンミュハン・ハートゥン霊廟(13世紀)に僧房が増築された⁸⁾。アマスヤのヤクブト・パシア僧院(メヴラナ教団, 1413年)では、狭小の暗室(一辺が1.8mの立方体)が並べられている⁹⁾。

礼拝室、集会室、僧房に続き、巡礼をする修行僧たちのための宿泊施設、厨房、食堂等が建設される。ハジ・ベクタシ僧院では中庭を挟み、北側に集会室、僧房が、南側に来訪者たちの施設が建設された。これらの施設は、材料の不揃い、各種の構法の採用等から、一度に建設さ

図—5 ハジ・ベクタシ僧院 平面・分析図

れたものではないと考えられる。それにもかかわらず、パースペクティブ、軸線を意識したプランから、同時期に前後して建設されたものと考えられる¹⁰⁾。分析図(図—5)で示した通り、中庭を貫く軸線とそれを分割するいくつかの軸により、諸施設の配置が規定されている。中庭を貫く軸は、ハジ・ベクタシが修行のため籠ったベシ・タシの方角を示しつつ、両端の2つの門の中心を通っている。そして中央の中庭部分では、A～Fの部分を、3:4:5:6:7:8の比の長さ分割される。北側の棟の連続アーチからの距離は6.18mで、回廊の内法が3.82mであるから、その比率は $\phi:1$ である。厨房のかまどから発せられた軸も同じように $\phi:1$ ($\approx 6.18\text{m}:3.82\text{m}$)に分割されている。そして建物の内部に入り、通路部分は5:6に分割され、厨房、食堂が7.50m四方の部屋となる。この大きさは集会室と同じである。中庭を貫く軸線からの距離も同じ(連続アーチまで6.18m)であり、両者とも儀礼の空間として僧院の中で同じ比重をしめていたと言える。また、礼拝室のミヒラブから発せられた軸(キブラ軸)はEの部分を $\phi^2:1$ ($\approx 5.06\text{m}:1.94\text{m}$)に分割する¹¹⁾。さらに、ベクタシ教団の修行場のひとつであるチレ・ハネの方角を示す。ハジ・ベクタシの墓室から発せられた軸は、中庭を貫通する軸と集会室から発せられた軸との交点で交わる。

4. 修行道場期

15世紀後半より、教団はさらに大衆に開かれたもの

になる。スーフィを自認しない一般の人々も教団の活動に加わるようになる。僧院によっては、鍛冶屋、皮革、染料、屠殺等の職人たちの同業者たちが集まり、僧院の経営を助けるようになる¹²⁾。さらには、僧院そのものが同業団のものになったものもあり、親方(ウスタ)が僧院長となり、僧院内に彼の住宅が設けられる。僧院に付属する修行僧の多くは、職人(カルファ)、徒弟(チュラク)であった¹³⁾。そして、このような僧院は同業団の構成員同士の相互扶助団体としても機能した。一定額の分担金を徴収し、それによって必要な時に構成員に貸付ける金融機関の役割を果たした¹⁴⁾。このような状況を背景に、僧院は同業団を中心とした共同体の象徴となっていた。

一般大衆の参加は、その修行形態を大きく変える。スーフィのように修行を専業としているわけではないので、修行の簡略化、形式化が必要であった。つまり、誰もが生業に携わりながらでき、それでいて神秘的な感覚に酔うことのできる修行方法が考え出される必要があった。16世紀には、唱名(ズグル)と旋回舞踏(セマ)が修行として確立してくる。

唱名と旋回舞踏が修行として確立することにより、それらの修行の場として新しい形の僧房、祭礼室(セマハネ)が建設される。僧房は読書を目的とすることから¹⁵⁾、聖者崇拜期のものとは異なり、明るく、暖炉等の設備のある個室となる。この僧房は、図書室や神学校のように共同体を象徴する施設等の併設により、修行よりも教育

という意味合いを強くしていく。

祭礼室が新たに僧院の中心的施設となる。舞踏の性格上、聖者崇拜期にみられた軸線を重視した配置は、ミヒラブの存在によりかろうじてキブラ軸が認識される程度にとどまり、それに代わって中心性の強いプランが選択されるようになる。この時期にオスマン帝国がヨーロッパ

図-6 キュチュック・エフェンディ僧院 平面図

バ世界、特にフランスと友好関係を結んだこともあり、バロック、ロココ建築の影響を受けたことも、この変化に拍車をかけた¹⁶⁾。バロック建築の影響を強く受けた僧院建築としては、イスタンブール市内のキュチュック・エフェンディ僧院（ベクタシ教団）をあげることができる（図-6）。この僧院の祭礼室は楕円形であり、外壁も大きく湾曲する。図書室は祭礼室に付属する平面になっているが、別に外からも訪問することができるようになっている。これは巡回舞踏中の教団員の瞑想状態を壊さないためである。僧房の一部は、代々皮革職人の親方である僧院長の住宅として使われていた。

巡回舞踏は、聖者崇拜期においては聖者に捧げる踊りであった。ハジ・ベクタシ霊廟内の祭礼室は聖者崇拜期のものであり、ハジ・ベクタシの墓室への前室の意味合いを持っている。そのため、修行道場期の例に比べて空間の集中性はあまり考慮されておらず、床に円形の絨毯

図-7 セイト・バットル・ガジ僧院 平面図

を敷く程度にとどまっている。当時の絨毯は現存せず、初めから円形であったのかどうかはわからない。

旋回舞踏が、聖者に捧げるものから修行としての要素を強めるに従い、踊りの中心を必要とするようになる。15世紀後半にはベクタシ教団の旋回舞踏もメヴラナ教団の影響を受け¹⁷⁾、次のようになる。修行僧は祭礼場にひとつの中心軸（通常、僧院長がその役目をする）を設定し、そのまわりを自分自身も左足を軸に左回りに回転しながら、その円周上を左回りに回る。修行僧は旋回することによって心理的に高揚し、忘我の境地に達する。このとき、祭礼場を恒星と惑星からなるひとつの宇宙に見立てようとしている。また、イスラムの5行「信仰（シャハーダ）、礼拝（サラート）、断食（サラム）、喜捨（ザカート）、巡礼（ハッジ）」のひとつである巡礼の最終行為である周巡（タワーフ）をも意味している¹⁸⁾。このように舞踏が意味づけられた上に、音楽等の助けにより安易に非日常的経験ができることにより、誰にも受け入れやすいものとなった。

セイト・バツタル・ガジ僧院の中庭に日時計があるが（図-7）¹⁹⁾、この時計の存在も、旋回舞踏の発生とは無関係ではない。祭礼場を恒星と惑星から成る小宇宙に見立てた場合、この日時計は恒星であり、そのまわりを回る修行僧は惑星となる。ただし、修行が形式化するに従い、祭礼場は気候の影響を受けにくい室内へと移っていく。

このような旋回舞踏に応えるべく建設された祭礼場を持つ僧院が、イスタンブール市内のメルディベンキョイ僧院（ベクタシ教団）である。初めから修行道場として建設された建物であり、聖者を祀る霊廟はない。祭礼室の他には、神学校、説話室、トルコ風呂、そして僧院長の住宅を含んだ僧房がある（図-8）。トルコ風呂の存在は、礼拝前の沐浴ばかりでなく、旋回舞踏を行なった後、修行衣を脱ぎ、汗を流すためである。このことは旋回舞

図-9 メルディ・ベンキョイ僧院 断面図

踏が宗教的行為の他に、娯楽（スポーツ）的意味を持っていたと考えられる。市内のトルコ風呂が一般大衆の娯楽の場であり、共同体の象徴であったように、この僧院がこの地区の共同体の生活の一部になっていたことを示す²⁰⁾。

メルディベンキョイ僧院の祭礼室は正十二角形平面で、その中央に円柱がある。その円柱はイスラムの象徴のシンボリズムに則った形で装飾が施されている²¹⁾。

18世紀後半、19世紀には、メヴレビ派の祭礼場（メヴレビハネ）が各地に建設されるが²²⁾、メヴレビ派の修行方法のひとつである旋回舞踏の形式に合わせ²³⁾、集中式平面を採用する²⁴⁾。しかし、メルディベンキョイ僧院のように、その天井がドーム状になることはない。集中式平面にもかかわらず、それが断面には反映されない。その理由としては、天井の高さが増し、天井の形状そのものがあまり意識されなくなったこと。音楽を演奏した際、ドーム天井では音が籠ってしまい、舞踏がしにくいこと。さらに、木天井に様々な幾何学文様、植物文様を刻むことにより、モスクのドームとは別の象徴性を得ることができたからだと考えられる。

このように天井の祭礼室がトルコ・イスラム僧院建築のアーキタイプとなっていく中で、メルディベンキョイ僧院だけが特異な展開をした。断面（図-9）を見ると、その天井はドームであるが、ドーナツ状のドーム天井であり、モスクのドームのように音が籠ることはない。また、高さが8.20 mもあり、旋回舞踏を行なっている人以外はその天井を意識することはない。さらに、中央の円柱が象徴的であるため、そのシンボリズムと調和をとる意味合いからも、このような形態となる必要があったと考えられる。

次にベクタシ教団の他の僧院で考察したように、メルディベンキョイ僧院においても、その比例関係を考えてみる。祭礼室は一辺が3.30 mでその半径が6.30 mの正十

図-8 メルディ・ベンキョイ僧院 平面図

三角形平面で、ドームの最上部まで 8.20 m、下端まで 6.05 m である。ということは、祭礼室の高さと平面の関係は、 $6.30\text{ m} : 8.20\text{ m} = 1 : 1.30$, $6.30\text{ m} : 6.05\text{ m} = 1.04 : 1$ である。上窓の大きさは 1.75 m であり、床より下端まで 3.85 m、上端まで 5.60 m である。これらを壁の高さ、つまりドームの下端までの、6.05 m で比を出してみると、 $1.75\text{ m} : 6.05\text{ m} = 1 : 3.45$, $3.85\text{ m} : 6.05\text{ m} = 1 : 1.57$, $5.60\text{ m} : 6.05\text{ m} = 1 : 1.07$ となる。扉と窓が同じ形でデザインされている開口部の高さは 2.35 m である。これを壁の高さと比べてみると、 $2.35\text{ m} : 6.05\text{ m} = 1 : 2.57$ となる。これらの数値は、教団成立期および聖者崇拜期のベクタシ教団の僧院のように、 ϕ を使った比例関係がないことを示す。修行道場期のベクタシ教団の他の遺構を詳しく調べてみる必要があるが、集中式平面の採用、イスラムの象徴のシンボリズムの建築化により、修行道場期においては、比例関係が他の時期に比べ、あまり重視されなくなっていたと考えられる。

5. おわりに

スーフィズムの大衆化の過程から、教団の性格も 3 つの時期に分けられる。僧院建築もそれぞれの時期に対応すべく発展する。僧院の本格的な建設そのものは、教団への在俗スーフィたちの参加により始まる。教団成立期の墓標は霊廟になり、聖者崇拜の象徴なる霊廟を中心として礼拝室、集会室、巡礼者のための宿泊施設、厨房、食堂等が建設された。

修業形態の確立とともに、僧院はスーフィたちのものから一般大衆のものになる。安易に神秘的な感覚に酔うことのできる修行方法（唱名、旋回舞踏）が考え出されることにより、僧院は修行道場化する。そのため 16 世紀以降の僧院では霊廟は建設されなくなり、僧院の中心的施設は、旋回舞踏の場である祭礼室に移る。このように修行道場期にその性格を変えた僧院は、共同体の象徴となるべく、浴場、図書室、神学校を併設するようになる。平面もメルディベンキョイ僧院等のように集中式平面となり、軸線と比例関係は、聖者崇拜期に比べ、あまり重視されなくなる。つまり、僧院の大衆化とともに、僧院そのものも大衆によりわかりやすい平面、形態に変化していった。

ケマル・アタテュルクの改革により、現在のトルコ共和国国内では、スーフィズムの信仰は禁止されている。さらに、トルコ人による研究は極端に制限されている²⁵⁾。このような状況の中で、ハジ・ベクタシ僧院（1983 年 8 月、1988 年 4 月、1991 年 4 月）、セイト・バツタル・ガジ僧院（1983 年 8 月、1991 年 3 月）、メルディベンキョイ僧院（1983 年 8 月、1989 年 6 月）で行なった実測調査への許可、さらに、ハジ・ベクタシ僧院博物館図書室

蔵およびメルディベンキョイ僧院蔵の文献の閲覧許可を出していただいたトルコ政府およびトルコ政府宗教建築保存団体アンカラ本部に深く感謝します。

注

- 1) アナトリア以外で結成され、アナトリアにも伝播された教団：Kazerun (1034), Kadir (1167), Rifa (1182), Sadi (1300), Nakşibendi (1390), Halvet (1397), Zeyni (1434) アナトリア以外で結成され、アナトリアには伝播されなかった教団：Yesev (1167), Medyen (1194), Kübrev (1221), Suhrever (1254), Çeşti (1255), Şazel (1258), Bedev (1276), Desuk (1295) アナトリアで結成された教団：Bektaş (1270), Mevlevi (1273), Bayram (1430)
- 2) 「ハジ・ベクタシ僧院博物館図書室蔵古文獻集」No. 01 (15 世紀), No. 02 (16, 17, 18 世紀), No. 03 (15, 16 世紀), No. 04 (16, 17 世紀), No. 05 (18, 19 世紀), No. 07 (19 世紀), No. 08 (18, 19 世紀), No. 09 (17, 18, 19 世紀), No. 10 (16, 17, 18 世紀), No. 11 (17, 18 世紀), No. 12 (14, 15, 16, 19 世紀), No. 13 (17, 18 世紀), No. 14 (17, 18 世紀), No. 15 (17 世紀)。「メルディベンキョイ僧院蔵古文獻集」No. 01 (16, 17, 18, 19 世紀), No. 02 (17, 18 世紀)。
- 3) Celal Esat : Mevlevilik ve İstanbul Mevlevilik, İstanbul, 1912. Mehmet Ziya : Yeni kapı Mevlevihanesi, İstanbul, 1913. Asaf Halet Çelebi : Mevlana, İstanbul, 1939. Can Karamentli : Galata Mevlevihanesi, Türkiye Turing ve Otomobil Kurumu, 1978
- 4) ハジ・ベクタシ僧院博物館図書室蔵古文獻集 No. 02-06
- 5) 山本達也 : ハジ・ベクタシ僧院調査報告, Türkiye Vakıflar Genel Müdürlüğü Raporları, p. 34, Ankara, 1992
- 6) Orhan Cezmi Tuncer : Anadolu Kümbetleri, Vol. 1, p. 177, pp. 336~339, Ankara, 1986
- 7) Tokgöz Demir : Seyit Battal Gazi Külliyesi, Eskişehir Anma Günleri Dergisi, Vol. 2, p. 5, 1978. Godfrey Goodwin : A History of Ottoman Architecture, p. 182, Thames and Hudson, London, 1971
- 8) Erol Altınsapan : Seyyit Battal Gazi Külliyesinde Yer alan Ümmühan Hatun Türbesi, I. Uluslararası Seyyit Battal Gazi Semineri Bildirileri, pp. 47~58, Eskişehir, 1990
- 9) Metin Sözen : Türk Mimarisinin Gelişimi ve Mimar Sinan, p. 113, Türkiye İş Bankası Kültür Yayını, İstanbul, 1975
- 10) 山本達也 : 前掲報告書, p. 64
- 11) ベクタシ教団の信者は、通常モスクで祈禱を行なうことはない。そのため、キブラ軸の重要度も、他のイスラム建築に比べ、2 次的なものになっている。
- 12) Evliya Çelebi : Seyahatname, Vol. 2 pp. 23, 141, 149, 173, 175, 267, İstanbul, 1896
- 13) トカット・ギョク・メドレッセ博物館図書室蔵古文獻集 No. 1202-F 105, 「トカット・メブレバハネに関する記録」によると、18 世紀には染物業者によって僧院は管理されていた。

- 14) Ahmet Refik : İstanbul Hayat (1495-1882), Vol. 3 p. 92, Enderun Kitabevi, İstanbul, 1988
- 15) 修行としては、教団員は僧房で教団特有の呪文を繰り返して唱えた。読書としてはコーランの他に、教祖等高僧にまつわる伝記、彼らの作った伝記等を読んだ。
- 16) Ayda Arel : 18. yy. İstanbul Mimarisinde Batılılaşma Süreci, pp. 11, 53, 105, İstanbul Teknik Üniversitesi, 1975
- 17) Celalettin Ulusoy : Hacı Bektaş Veli ve Alevi-Bektaş Yolu, pp. 31, 211, Hacıbektaş, 1986. ベクタシ教団の教祖ハジ・ベクタシとメヴラナ教団の教祖ルーミーは、アナトリアの宗教についてコンヤにて論議し合っている。そして、修行方法についてお互いに強い影響を与え合っている。
- 18) ベクタシ教団においては、ハジ・ベクタシが修行したベシ・タシを訪ねた後、ハジ・ベクタシ霊廟を参拝した教団員をハッジと呼んでいる。
- 19) Tokgöz Demir : 前掲書, p. 5, 現在, 日時計の上にシャドウランパン（手足を清める所）がある。
- 20) メルディベンキョイ僧院蔵古文獻集, No. 01-12, 01-13
- 21) 芝浦工業大学建築工学科三宅研究室 : スーフィの建築 (IV メルディベンキョイ僧院), 新建築 1985 年 1 月号, p. 304, 1985 年
- 22) ベクタシ教団は、18 世紀後半親衛隊（イエニチェリ）の衰退とともにその勢力を弱めていく。さらに、19 世紀初めマフマット II 世により断圧され、それ以降、僧院の建設はない。
- 23) 注 17) で述べたように、ベクタシ教団の旋回舞踏に類似している。詳細は、「Metin And : Mevlana Celaleddin Rumi and the Whirling Dervishes, Dost Yayınlar, İstanbul, 1983」を参照
- 24) イスタンブール・ガラタ・メヴレビハネ（正八角形）、トカット・メヴレビハネ（正八角形）、ブルサ・メヴレビハネ（正十六角形）、キュタヒヤ・メヴレビハネ（正十六角形）等。
- 25) 上述したものその他、僧院一般を取扱った研究書としては、Mustafa Kara : Tekkeler ve Zaviyeler, İstanbul, 1980. があるだけである。また、トルコ政府宗教建築保存団体（Vakıflar）アンカラ本部図書室に、コンヤ・メヴラナ僧院、カスンバシヤ・メヴレビハネ、イエニカブ・メヴラナハネ、コジャ・ムスタファ・パシヤ僧院等の調査報告書がある。

(1992 年 2 月 10 日原稿受理, 1992 年 11 月 19 日採用決定)